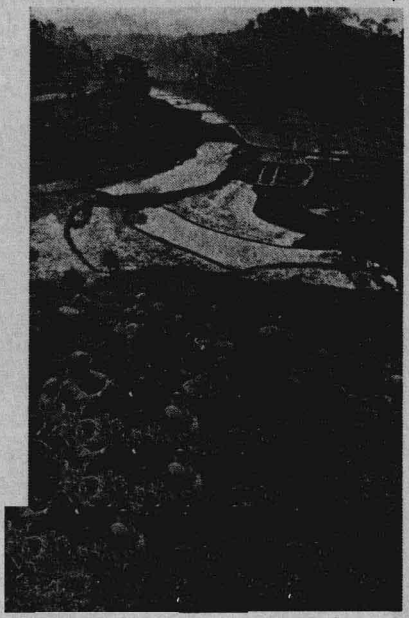
日中戦争日記

第四巻

日中戦争日記

第四巻 華南掃蕩戦

村田和志郎



鵬和出版

著者略歴

村田和志郎（むらた・わしろう）

明治三十六年十月　福岡県　穂郡碓井村生まれ
大正十二年三月　福岡県立嘉穂中学校卒業
昭和三年三月　明治大学法学部独法科卒業
昭和五年三月　陸軍幹部候補生
昭和五年十一月　陸軍歩兵伍長（予備役編入）
昭和十二年九月　召集、歩兵第百二十四聯隊所属
昭和十三年六月　陸軍歩兵軍曹
昭和十五年四月　召集解除
昭和十九年二月　臨時召集（将第一四六一部隊、造第一一四〇部隊、隼第一六六六七部隊等に所属）
昭和二十年三月　陸軍歩兵曹長
昭和二十年八月　現地召集解除

日中戦争日記　第四巻

昭和六十年一月十日　初版発行　定価千五百円

著者　村田和志郎
編者　宇都宮泰長

発行者　竹内　洋

発行所　鵬和出版
東京都目黒区八雲五―十―一―二〇一号
電話（〇三）七一七―四三三六代
振替口座　東京　八―四九六一九番

製版　法規書籍印刷株式会社
印刷
製本　長崎製本株式会社

（落丁本・乱丁本はおとりかえいたします）

ISBN4-89282-027-X　Printed in Japan

目次

昭和十四年

二月二日　工兵隊広東へ引き上げ……9
朱村、嫁入り見物……11
二月五日　郷土出身慰問団来訪……20
二月七日　討伐準備……25
二月八日　討伐出動……28
二月十八日　木下部隊長病死……54
二月二十三日　宣撫工作……62
二月二十六日　南支皇軍慰問団……68
三月四日　増城へ移駐……78
三月七日　墜落海軍機……94
三月十一日　抗日文書……112
三月十四日　ピー移転……122

四月一日　初年兵の戦死……152
四月六日　敵襲……162
四月七日　広東人の観察……168
四月十四日　緊急出動……177
四月十七日　捕虜（少年兵）……187
四月二十四日　中国女性の惨殺死体……204
五月三日　日本軍捕虜秘話……225
五月六日　捕虜斬殺……231
五月十五日　友軍相撃ち……249
五月十六日　掃蕩戦……251
五月二十六日　逃亡兵……265
五月二十八日　こんな兵隊……268
五月二十九日　日本人慰安婦……272
五月三十日　忠勇美談集……274

装丁・構成　宇都宮泰長

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

◇第一巻目次（内容）

昭和十二年

九月　召集

入営

十月　門司乗船・出港

富江港入港

富江島見聞記

富江港出港・佐世保入港

佐世保出港

十一月　杭州湾上陸

楓涇鎮附近の戦闘

楓涇鎮における戦闘詳報

嘉善附近の戦闘

嘉興附近の戦闘

嘉興入城

八里店における捕虜虐殺

十一月　湖州地区警備

朝鮮人慰安婦

十二月　湖州出発

漂陽より反転、宜興・長興へ

富陽附近の戦闘

昭和十三年

一月　杭州入城

師団主催慰霊祭

賀陽宮入来

慰安婦配当

慰安所開業

◇第二巻目次

昭和十三年

二月　湖州に再入城

討伐戦闘日誌

掃蕩戦闘概要
湖州帰営
三月　生首随想
遺骨捜索
四月　小堺部隊長離隊
五月　李家巷の戦闘
呂山～紅渓鎮確保
兵員損耗状況
六月　日本ビー開店
不祥事件発生
七月　湖州出発
杭州再入城
杭州出発、上海へ
抗日秘密テロ団
八月　竺家橋籠城
討伐出動
江湾兵舎へ移動
九月　大上陸演習
軍情報
遺骨箱準備
輸送船大破
上海碼頭へ

◇第三巻　目次

昭和十三年

十月　乗船
呉淞沖へ出航
バイヤス湾上陸
伝単「親愛証」
広東入城
伝単「日本農民大衆ニ告グ」
広東市内掃蕩

広東郊外出発、燕唐へ
熱発
十一月　蚊帳徴発
三名行方不明
シャーリ・テンプル写真入手
捕虜九名の顚末記
討伐行
捕虜銃殺
十二月　新塘宿営
旅団長来塘
聖旨伝達
朱村移駐
献納毛布
大晦日
昭和十四年
一月　拝賀式
一月　参謀巡視
工兵隊陣地構築
良民証発給

日中戦争日記　第四巻

凡例

一、本書（第四巻）は、便箋百五十一枚に記された昭和十四年二月一日より昭和十四年五月三十一日までの日記の全文である。

一、内容については、あまりにも個人的な公表をはばかられる箇所は削除した。

一、仮名づかいについては現代仮名づかいに改めたが、文脈から原文のままにしたところがある。

一、誤字脱字、誤記の明らかなものは訂正し、漢字についても現代風に改めた部分がある。（　）内は戦後、説明として追加したものがある。

一、時刻については表記を漢字（午後五時とか一七〇〇など）にした。ただし、引用文についてはそのまま記した部分がある。

一、部隊記号、部隊符号については文字で表記することに統一した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

昭和十四年

二月一日　晴

九時、チフス予防接種。伊藤伍長と二人で朱村の中を歩く。家庭訪問である。午後は五時迄昼寝。夕食後、陣地見学。公園強化、掩蓋銃座を見る。神崗自治会要人の札、警察の証など発行。工兵引き上げ電話来。夕、諸岡医官など大勢来りて雑談、十時となる。無線の上等兵から方向探知の実際、間諜班の仕事を聞く。胸痛む。十時半臥。

二月二日　午後曇、のち陽照

早暁、工兵隊広東へ引き上げ。工事は歩兵によって続行。昨夜、無電押電せしところなり。勘違いして帰還と思い込んだ大正五年兵の四十一歳達、昨夜は寝ないで一晩中喜んでいたと言うことである。今朝もそのせいか夜の明けぬ中に出発してしまった程であった。

山本軍曹と語る。「〇〇というのが私の班に居て、のたりのたりしてましてね、金権を振る舞ったり、写真をとってみたりしましてね。あんなのは軍規を乱しまさあ」と、いうようなことを言う。「〇〇という福師教諭（漢文）も同じようでしたよ。どっちも中隊（原隊）へ戻してやりましたよ」。

悪い奴はどしどし出してしまうのが彼の方針。大いに結構である。どこにだってそうした兵はいる。自分もどしどしそれをやってのけた。大いに粛清工作をやったもんだ。馬鹿な奴程、金で何とかなると思って金を使う。誰もこれには一も二もなく参ってしまう。然しなかなか参らぬ好漢もいる。そして粛清をやって行く。いい気持だ。酒さえ飲ませればいいと思っている奴がいるけれど、上下共であるが、然し見透かされ追い出される。山本君の兄は砲兵中尉、留守隊附と言った。本人は大丸に勤めていたらしい。

午前中は書類綴の手伝いを久家にやらせ、午後は小隊長を集めてそれを閲読させる。中隊本部の大部分は副食物購入に近村へ出発した。曇って雨になりそうになった。

井上富三郎上等兵が走り込んで来る。何事かと思うと、「満期も近いようですけ、挨拶状を一寸書いて呉れませんなあ」と言う。今すぐと言うので黄紙をとって十行ば

かり書く。「これを毎日諳誦しようと思います」と、言って帰って行く。二月下旬、後期移動というような話を、小隊で流行っているものと見える。

軍隊には予防注射が多い。もういくつしたか知れぬ。コレラ、チフス、赤痢という風に。小さい針だけど痛い。戦争に出て行くのと比べたら注射の方がいやだと皆言うに違いない。わけもなくいやがる者もある。右胸の注射のあとが未だ痛む。

陣中日誌一月分、隊長の検閲を了しガリ版掛かり、駒井二等兵へ廻付した。

坂本上等兵が団子を作り、サイダーを抜いてくれる。よく気を付けて呉れる。

無電が二時半に入る。隊長を求めて渡す。「師団命令ニヨリ陣地構築一時中止。増援隊ハ三日帰還セシムヘシ」

引揚命令を各隊に伝達。鉄線張りもしなくていいと言って、彼等各隊の兵士は大喜び。諸岡軍医来談。夕食。購入班帰隊。嫁入りの鐘、太鼓の音、皆見物に飛び出す。

日夕点呼後、伊藤伍長と二人で嫁入り見物としゃれる。朱雲という自治会要人の妹であると言う。

公園の南側で二間の家がずっと続いている。乞食ではないけれど貧農の家である。二戸建の平家で整然と建っている点、アパート式であるが、支那人の方が進歩的であ

ると思われる。狭い路地は兵隊で一杯。それをかきわけて朱雲の家へ入る。奥の家で、扉には「自治会役員の住宅につき兵の立入を禁ず。安永隊長」と安永中尉が書き出している。門口の前が極狭い。その狭い処に一杯になって、テーブルを取り巻いて食事をしている。集まっているのは女ばかりである。何れも飯を食っている。豚肉、鶏肉らしいもの、芋類を煮たのが小さな皿に盛ってある。盛んに食っている。ここをすり抜ける。汚い是等の御客の着物に触れるのが気になる。やっと家の中に入ると、ここは竈(かまど)になっているが暗い小さな一部屋で、次に寝屋があるけれど戸が締まり黒い幕が下がっている。この中に嫁がいることははっきりわかってはいるが、押してみるが戸が開かない。

朱雲の家の母親とは顔見知りであるし、「看々」と言うけれどきき入れない。泣いている手真似をしきりにする。大体、嫁は一切誰にも見せぬことになっているらしい。大分粘ってみたが仕方がないので帰りかけると、兵隊が一人、二人押し寄せて来る。ずっと遠くに待っていた兵隊達は、にじり寄って来て戸口近く迄こぎつけた。

仕方がないから表に出て石の台に腰を下ろす。しばらくして、この開かずの戸に近づいた時、中から飛び出して来たのが朱雲であった。その隙に入るわけにも行かず、

朱雲に「看々」と言うと、今度は体を洗っている恰好をする。仕方がないから家の前の石台に座って待つこととした。朱雲も座ると、石畳に何か書きつけるのでよく見ると、「神崗土匪、三十名、有短槍二時去」と書いている。二時半には物品購入に日本兵がそこへ行ったのだ。更に書き続け、「良民匪賊識別困難」と書いている。

直ぐ傍らに盲目の老婆等が集まっているので、これは何かと尋ねると乞食と書く。手提籠を持ち、皿を持っている。嫁入りの出来るのは金持ちなので御馳走も出る。そのおこぼれを戴こうというわけである。

乞食以外の女達は「請来」と書く所から、何でも招待したものであろう。御馳走はつぎつぎに運ばれたが、「猫マタギ」のようだと悪口をいう兵隊が居て、大切な嫁入りも日本兵に掛かっちゃ話にならぬ。

路地には輿(こし)がおいたままになっていた。この輿の辺り迄もう兵隊で一杯になってしまったので、其処らにいた乞食は居処がなくなった。乞食を追っ払う兵隊もいるので、自分は「乞食だけはいじめるな」と、どなりつけた。「一年に一回もない嫁入りの御祝いじゃ、うんと祝ってやれ」、自分はそう言わざるを得なかった。

入れ替わり立ち替わり老婆達は食う。乞食の容れ物には一向何も入らなかった。そ

れから楽隊が来た。打楽を始めた。鐘を叩き笛を吹き出した。やかましく、ガラガラジャラジャラいう音、あの独特の支那楽が鳴り出した。騒々しいけれど哀調が幽かに通って賑やかな音が出て来る。十分間も続く。もう今にも御嫁さんが出て来るかと、皆待ち遠しがっている。

自分はもう出て来るかと思ってのぞいてみるが、一向に出て来そうにもない。すると中の戸が開いているのでするりと中へ入ると、真っ暗な部屋の隅の白色の蚊帳の中に一人の黒い着物を着た女が座っていて、丁度こっちを見ていた。色は白いけれど栄養不良の蒼白な顔で、兄の朱雲に似た所がある。よくみる暇もない。彼女は直ぐ蒲団を引っ被って寝てしまった。ほんの一瞬であった。

正面の奥の寝台の上には手提カバンが開かれて居て、中には赤い紙をつけた植物の葉が結わえてあるのが三つ四つ、何とか餅と書いてある。その他には蜜柑が三つ、クワイが十五、六詰め込んであった。これが嫁への心づくしであろう。

又、路地へ引き返して来て待つ。打楽は一瞬止んだが今にも出て来るかと一同は嫁を待ち構えている。人一人が通れるか通れぬ位の間隙しかない。「凱旋兵を迎え出るようだなあ」と、はしゃぐ者さえある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com